第八講『源氏物語』〈幻〉

次の文章は『源氏物語』の一節であり、光源氏が最愛の女性であった紫の上を亡くしてから一年が経過したところから始まっている。読んで、後の問に答えよ。

今年をばかくて忍び過ぐし<u>つれ</u>[A]ば、今は世を去りたまふべきほど近く思しまうくるに、あはれなること尽きせず。やうやう<u>さるべきことども</u>[①]、御心の中に思し続けて、さぶらふ人々にも、ほどほどにつけて物賜ひなど、おどろおどろしく今なん限りとしなしたまはねど、近くさぶらふ人々は、御本意(ほい)遂げたまふべき気色(けしき)と見たてまつるままに、年の暮れゆくも心細く悲しきこと限りなし。

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破(や)れば惜(を)し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、※かの須磨のころほひ、<u>ところどころより奉りたまひける</u>[ア]もある中に、かの御手なるは、ことに結(ゆ)ひあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、※久しうなりにける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年(ちとせ)の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、か

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ひなくて、疎（うと）からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせたまふ。

いと、かからぬほどのことにてだに、イ過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎（みづくき）に流れそふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがかたはらいたうはしたなければ、②おしやりたまひて、

死出（しで）の山越えにし人をしたふとて③跡を見つつもなほまどふかな

（『源氏物語』による）

（注）
かの須磨のころほひ―源氏が都を離れ、須磨・明石に蟄居（ちっきょ）していたころ、の意。
久しうなりにける世―源氏が須磨・明石より帰京したのは、二十年以上前のことである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部Aの「つれ」と同じ助動詞が用いられている箇所を、直前の動詞とともに本文中から抜き出し、それぞれ助動詞の活用形の名称を答えよ。

助動詞を含む箇所	活用形
過ぐしつれ	

問二　傍線部①「さるべきことども」とあるが、どのようなことを指すのか、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部ア、イを現代語訳せよ。

ア＝

イ＝

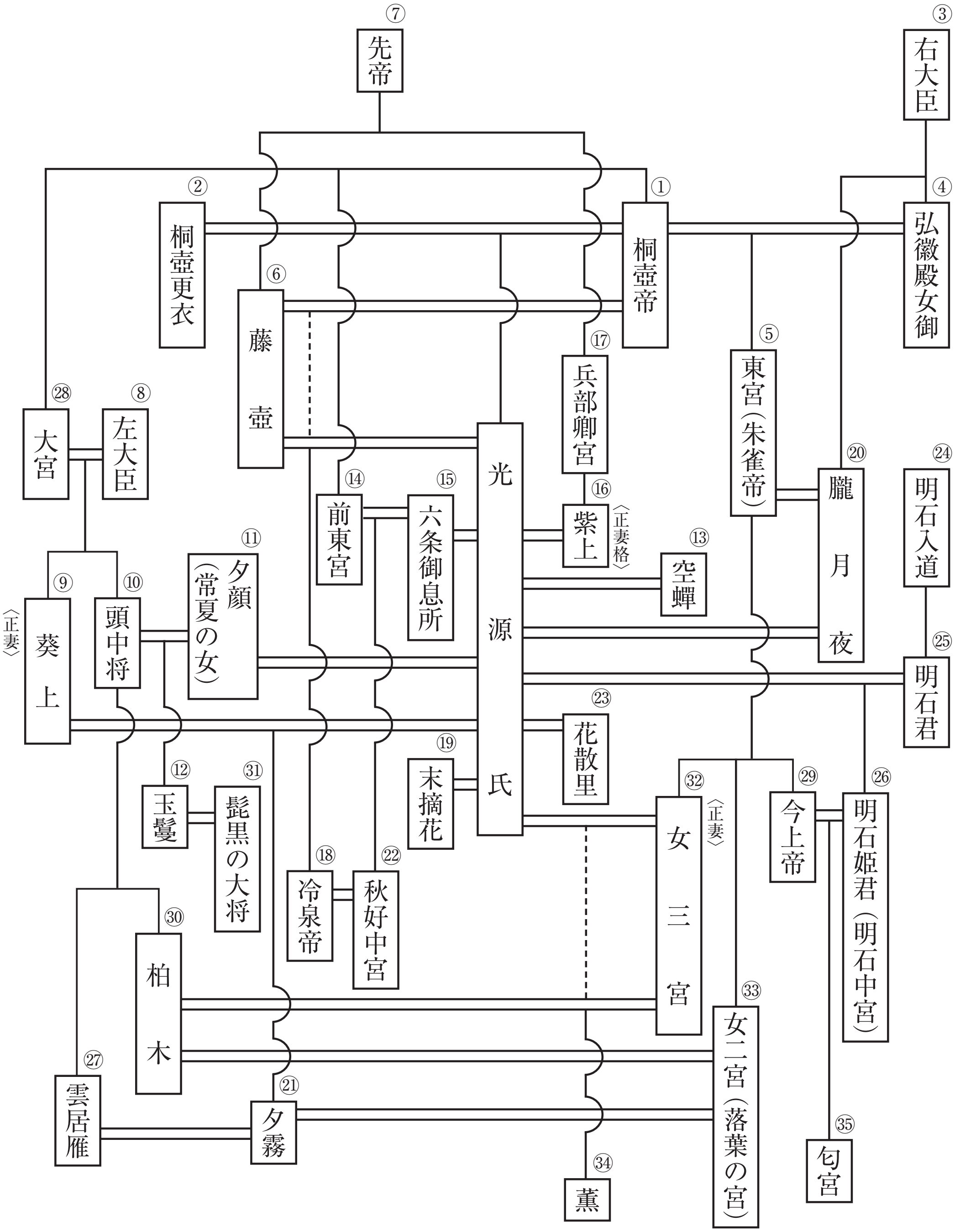
© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部②について、源氏がこのような行動に出た理由を説明せよ。

問五　傍線部③について、「跡」と同じものを指していると思われる言葉を、第二段落の中から二つ抜き出して答えよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【補足】〈『源氏物語』人物関係図(1)〉



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

『源氏物語』　あらすじ

〈1帖「桐壺」～41帖「幻」〉

①桐壺帝（きりつぼてい）〔源氏の父〕は②桐壺更衣（きりつぼのこうい）を寵愛するが、桐壺更衣の父大納言は既に亡くなっており、たいして高貴な身分でもないために、桐壺帝のもとへ一番に入内した③右大臣の娘である④弘徽殿女御（こきでんのにょうご）をはじめとして、様々な女御たちから桐壺更衣は猛烈ないじめを受ける。しかし、桐壺帝の寵愛はさらに深くなり、桐壺更衣は「玉の男皇子（をのこみこ）」を生む。これが光源氏である。桐壺帝の源氏への愛情は格別であった。桐壺帝と弘徽殿女御との間にも先に男の子が生まれており（第一皇子＝⑤東宮〔後の朱雀帝（すざくてい）〕）、その子が皇太子になると世間では思われているが、桐壺帝の源氏へのかわいがり方が並大抵ではないので、弘徽殿女御は「もしかしたら光源氏が皇太子になるのでは…」と疑い、さらに桐壺更衣をいじめたおす。桐壺更衣はそのいじめで心労が重なり、病気がちになって、源氏が三歳の頃に死んでしまう。桐壺帝はショックを受け過ぎて引き籠ってしまう。

それから四～五年が経ち、「桐壺更衣によく似ている女性がいる」と桐壺帝は聞きつけ、その女性の入内を申し入れる。その女性こそ、将来、源氏の永遠の憧れ人となる⑥藤壺（ふじつぼ）であった。藤壺は、噂通り桐壺更衣にとても似ており、悲しみに沈んでいた桐壺帝の心は自然と慰められていく。藤壺は、⑦先帝の四の宮であったため、身分もきちんとしており、桐壺帝から寵愛を受けても桐壺更衣のようにいじめられることはなかった。源氏は亡くなった母親〔＝桐壺更衣〕の容貌の記憶があまりなかったが、典侍（ないしのすけ）から「藤壺はお母さんに似ている」と聞かされたので、藤壺の中に母親の姿を感じて憧れる。藤壺も桐壺帝から「源氏の亡き母親とそっくりだから、この子〔＝源氏〕のことを疎まずかわいがってほしい」と言われており、まだ幼かった源氏の母親代わり（と言っても、年齢は実は源氏と五歳しか変わらない）として、かわいがる。

源氏は十二歳で元服し、⑧左大臣の娘の⑨葵上（あおいのうえ）（四歳年上）と政略結婚させられる。元服すると今までのように藤壺に会うことができなくなるので、源氏は寂しくて仕方がない。葵上は、自分は東宮妃になるものだと思っていたので、東宮でもない四歳も年下の源氏の妻になったことが耐えられない。そもそもこの結婚は帝と左大臣が勝手に決め、当人同士はその気がないことから、夫婦関係はうまくいかない。

源氏は葵上とは不仲ではあったが、その兄の⑩頭中将（とうのちゅうじょう）〔後の内大臣〕とは仲が良く、他二名を加え四人の男で「どのよ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

うな女性が良いか」という人物批評をしたりする（「雨夜の品定め」）。その中で源氏は「上流階級でプライドが高い女よりも、中流の女性の中に教養も兼ね備えた素晴らしい女性がいる」という話を聞く。そして、頭中将は「こっそり人知れず通っていた（中流の）女性がいて、女の子までもうけたが、自分の妻（③右大臣の娘四の君。人物関係図では省略）に脅されて姿を隠した。今はようやく忘れかけているが、その女性はきっとまだ自分のことを忘れられずにいるだろう」と話す。その女性が⑪常夏の女（＝夕顔）で、女の子が⑫玉鬘である。

「雨夜の品定め」でいろんな女性の話を聞いた源氏は、人妻である⑬空蟬（八歳年上）と一夜限りの関係を持つ。源氏は夢中になるが、空蟬は自分の身分や立場をわきまえて、源氏の誘いを拒み続ける。夜に忍び込んできた源氏に気づいた空蟬は、自分の単衣と義理の娘の軒端の荻（人物関係図では省略）を残して部屋から退出。源氏はそのまま気づかず寄り添い、次第に人違いだと気づいたが、どうすることもできず軒端の荻と契りを結ぶ。最後いろいろありきたりな言葉を交わし、源氏は空蟬の単衣を取って出て行った。

その後源氏は、亡くなった⑭前東宮の妻である⑮六条御息所（七歳年上）のもとに通うようになる。源氏にとっては遊びの恋愛であるが、六条御息所は光源氏に本気で恋をしてしまう（これが後々大変なことになるのである）。

源氏の乳母が病気になり、源氏が乳母のところにお見舞いに訪れた時に、隣の家に住んでいた⑪夕顔（二歳年上）と出会う。夕顔からの手紙が素晴らしい筆跡と内容であったので、「身分が低いものが住む家かと思うようなところに、意外にも風流な女が見つけられたら嬉しい」と源氏は思い、「雨夜の品定め」でいろいろな階級の女性の話も聞いていた源氏は夕顔に興味を持ち、お互い素性を隠したまま恋に落ちる。ある日、源氏は夕顔と、夕顔の侍女の右近のみを連れ出して、夜二人きりで過ごし少し寝入った頃、源氏の枕元に女性が現れ「私のところには訪ねて来ないで、こんなたいしたこともない女を引き連れているなんて、つらくてたまらない」と言って、隣で寝ている夕顔をその女性が襲う夢を見て、源氏は目を覚ます。この女性が⑮六条御息所の生霊であり、とりつかれた夕顔はこのまま目を覚ますことなく死んでしまうのである。当然であるが、源氏は六条御息所のところへもなかなか足が向かなくなってしまう。

夕顔の死でショックを受けた源氏は病気になり、北山の僧のところに加持祈祷で出かけるが、その辺りを歩きまわっていて覗いた家に、とてもかわいく、あの藤壺にそっくりな女の子を見つける。それが⑯紫上（八歳年下）である。藤壺に似て

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

いるのはたまたまではなく、実は紫上は、藤壺の実の兄である⑰兵部卿宮（ひょうぶきょうのみや）が愛人との間に作った女の子であり、藤壺の姪にあたる。紫上と一緒にいた尼君に、源氏は紫上との結婚を前提とした後見役を申し出るが断られる。が、この尼君が亡くなり、「父親の兵部卿宮に引き取られる」という噂を聞いた源氏は、先に強引に自分の住んでいる二条院に連れて来て、自分好みの女性に育てていき、後に理想通りの妻とするのである。

その間にも、病気のために里に下がっていた藤壺のもとを訪れた源氏は、自分の気持ちが抑えきれなくなり、実父の妻であり、自分の義母でもある藤壺の部屋に強引に入って迫り、関係をもってしまう。それがもとで、藤壺は妊娠。その子が後の⑱冷泉帝（れいぜいてい）である。もちろん出生の真実は言えないので、世間的には桐壺帝との子ということになっている。源氏は自分の犯した罪に苦しむが、藤壺もこのことに悩み苦しみ、その後、源氏のことを避け続けるのである。何も知らない桐壺帝は、生まれてきた冷泉帝を「源氏の幼いころにそっくりだ」と大喜びでかわいがり、藤壺はさらに罪悪感に苛まれる。

源氏は、他にも⑲末摘花（すえつむはな）（鼻が赤く、「源氏の相手」の女性の中で不器量として有名）とも関係を持つ。

藤壺に避けられ寂しい源氏は、③右大臣の六番目の娘である⑳朧月夜（おぼろづきよ）と出逢い恋に落ちる。最初お互い素性を隠すが、朧月夜は最初から源氏だと気づいていた（源氏は誰かわかっていない）。朧月夜は⑤東宮への入内が決まっていたが、朧月夜は政略結婚が嫌で、源氏との恋愛にのめり込んでいく。源氏もそのうち、相手が政治上敵方になる右大臣（源氏は⑧左大臣の娘の⑨葵上を正妻にしているので、左大臣側の人間である）の娘だと気づいたが、朧月夜と会うことをやめようとしない。さらに、入内した後も二人の恋愛は続いており、完全に不倫関係である。

桐壺帝が譲位し、⑤東宮は朱雀帝に、藤壺と源氏（世間的には桐壺帝）の子（⑱冷泉帝）が東宮となる。こんな中、不仲だったはずの正妻の葵上も妊娠。不仲ではあったが、はじめての妊娠で葵上も不安で、いつものようにプライド高くすましていることもできず、そんな姿が源氏にはかわいらしく思え、妊娠を機に二人の仲は良くなっていった。

賀茂祭の御禊（ごけい）の日、源氏が行列に参加することになるが、それをこっそり見に来ていた六条御息所の一行と、正妻の葵上の一行が場所争いをし（「車争い」）、先に来ていたのは六条御息所だが、「正妻」の立場の葵上には勝てず、場所をどかされただけでなく、乱暴によって牛車も破損され、たくさんの人の中で六条御息所は恥をかかされる。源氏は後で、その出来事を知り、六条御息所のもとへ謝罪に行くが会ってもらえない。さらに、六条御息所は、不仲だと聞いていた葵上の妊娠を知り、嫉妬の

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

あまりに、またもや自分の意志ではコンロトール不能となり、知らず知らずのうちに生霊となってしまうのである。葵上が出産で苦しんでおり加持祈祷をするが、源氏が看病している時に、葵上に乗り移った六条御息所の生霊が、源氏に自分のつらさを葵上の身体をかりて訴えかける。葵上はなんとか男の子㉑夕霧(ゆうぎり)を生むが、生霊に憑りつかれたため出産後葵上は急死。そして、正妻がいなくなった源氏は、⑯紫上と半ば強引に契りを結ぶのである。一方、六条御息所は無意識とは言え、自分の生霊が二人の女性を殺してしまったことを自覚しており、いたたまれなくなり、亡くなった前東宮との間の娘（後に冷泉帝の妻となる㉒秋好中宮(あきこのむちゅうぐう)）が伊勢の斎宮と決まっていたので、娘と一緒に伊勢に下向することを決める。源氏はそれを知り、六条御息所を哀れに思い、六条御息所の元へ訪れ別れを惜しんだ。

　桐壺帝が亡くなり、藤壺は源氏を避けるためにも出家。藤壺への想いが完全に断たれてしまった源氏は、朧月夜との不倫で心を慰めていたが、これがとうとう右大臣一家にばれてしまう。桐壺帝が亡くなった今は、⑤朱雀帝の世で右大臣家が栄えている。政治上敵方の不倫の愛の代償は大きく、源氏はこのまま都にいることはできず、自ら須磨に退去することを申し出る。

　須磨に行くまでに、かつての恋人でもある㉓花散里(はなちるさと)の元へ行く。花散里は、たいして美しい女性ではなかったが、性格がとても良く、源氏が苦しい時にはいつも精神的に支えていた存在の女性であり、源氏もとても大切にしていた女性である。後に源氏と葵上の息子である㉑夕霧の母親役を務めるほど源氏に信用されていた。

　いよいよ源氏は、愛する紫上や藤壺たちに別れを告げ須磨へ行き、寂しい日々を過ごしていた。須磨では激しい嵐が続いていたが、ある夜、源氏の夢に桐壺帝が出てきて「神の導きに従い、須磨を離れるように」と告げる。その翌朝、㉔明石入道(あかしのにゅうどう)が船でやってきて、源氏は「これがお告げのことだ」と思い、明石へ行った。明石入道は、自分の娘である㉕明石君(あかしのきみ)をかねてより高貴な人の妻にしたいと思ってきたが、源氏をまたとない相手であると考え、源氏に娘との結婚を薦める。源氏はすぐに乗り気になるが、明石君は身分の違いを自覚しており、自分のような田舎の女はいつか捨てられるはずだと気が進まない。が、ついに源氏は明石君の部屋を訪れ、契りを結ぶ。想像以上に美しく教養も深い明石君に夢中になり、源氏は連日のように訪れ、京都の紫上に明石君との結婚の報告を手紙で伝える。紫上はさすがにショックを受け、源氏を非難するような返事を送る。源氏も紫上からの手紙で反省をし、明石君の元に通うのを少し控えるが、それはそれで明石君が「最初に考えていた通りだ」と内心ショックを受ける。が、たまに訪れる源氏には、そのような素振りは一切見せず普通に振舞い、そんな明石君のけなげな

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

様子が源氏にはさらに愛しく感じた。ついに明石君は源氏との子を妊娠する（その子が後に明石中宮となる㉖明石姫君）。

一方、都では③右大臣が亡くなり、④弘徽殿女御も病気になり、⑤朱雀帝も病気で目を患い、さらに、朱雀帝は夢の中で①桐壺帝から怒られ、源氏を都に呼び戻す決断を下す。源氏は妊娠中の明石君に「いつか必ず迎えに来る」と約束をし、明石に残したまま都に戻る。源氏が都に帰ると朱雀帝は譲位、藤壺と源氏〔世間的には桐壺帝〕との子が⑱冷泉帝として即位する。源氏は、冷泉帝の補佐役として内大臣に昇進する。こうして、左大臣派の世の中になる。

明石では、明石君が無事、明石姫君を出産。源氏は祝いの品を明石に送るが、子供がいない紫上は内心嫉妬する。

六条御息所と娘の斎宮〔＝㉒秋好中宮〕は、伊勢から都に戻って来ており、六条御息所は病気になる。源氏がお見舞いに訪れると、六条御息所は娘のことを源氏に託す。ただし、「娘には絶対に手を出さないように」とお願いをして亡くなった。源氏は遺言通り斎宮を養女として引き取り、冷泉帝に入内させることを決めた。入内するまでは紫上に斎宮の世話を託し、子供好きなのに子供がいなかった紫上は喜んで面倒を見る。そして後、斎宮は入内をし、梅壺の女御を経て秋好中宮となる。

花散里の元を訪れようとした源氏が、道中たまたま荒れ果てた家が目に入り、「見たことがある家だ」とよく考えれば、それは⑲末摘花の家であった。源氏が須磨へ行ってしまい、後見役を失った末摘花は、周りの女房たちにも見放され、伯母が「自分の娘の召使いにしよう」と九州に連れて行くことを企んだりもしたが、それでも源氏を信じて、どんなに貧乏になろうがずっとその場を離れず源氏を待ち続けたのである。今まで自分のことを完全に忘れていた源氏に恨み言を一つも言わず、十一年ぶりにやっと会えた喜びでいっぱいになる。そんな姿に源氏も感動し、最終的には末摘花を二条東院に引き取った。

源氏は明石君と明石姫君を都に迎えたいが、明石君はやはり身分の違いが不安でなかなか上洛できない。そこで明石入道が、源氏が建てた嵯峨野の御堂が近くにある大堰川近くの山荘に、明石君と明石姫君を住まわせることを決めた。源氏は紫上を気遣い、なかなか訪れることができないが、御堂に行くことを口実にやっと訪れ、三年ぶりに明石君と再会し、自分の娘である明石姫君と初めて対面する。源氏は「この娘の将来のためにも自分の手元に引き取りたい」と考え、紫上に「養女として明石姫君を育ててほしい」と相談をし、子供好きの紫上は喜んで引き受ける。が、明石君にとっては、娘との別れとなるので、娘の将来のためとはわかっているが、なかなか決断ができないでいた。が、やはり田舎ものの自分が育てるよりも都で源氏の手元で育ったほうが娘の将来のためだと考え、断腸の思いで決断を下す。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

藤壺が三十七歳で病気のため亡くなる。源氏は悲嘆にくれる。さらに冷泉帝は、ある僧から自分の出生の秘密を聞き、本当は源氏の子供だということを知る。冷泉帝は天皇の位を父親の源氏に譲ろうと考えたが、源氏は拒絶する。

源氏と葵上の息子㉑夕霧が、十二歳で元服。夕霧は⑩頭中将〔この頃は内大臣〕の娘の㉗雲居雁（くもいのかり）と幼馴染じみであり、恋仲であった。夕霧は、葵上の母親の㉘大宮に育てられており（後に二条東院で㉓花散里が夕霧の養母となる）、雲居雁も訳あって大宮に育てられていた。内大臣〔＝⑩頭中将〕は、娘の雲居雁を「東宮〔後の㉙今上帝〕の妃にしよう」と考えていたので、夕霧との仲を知り、怒って自分の邸に雲居雁を引き取ることを決める。が、二人は密かに手紙を交わし続ける。

この頃、源氏は六条に大邸宅の「六条院」を完成させ、四季の町に分け、春の町に紫上を、夏の町に花散里を、秋の町に里帰り用の邸として秋好中宮を、冬の町に明石君を住まわせた。そして、さらにこの頃、⑪夕顔の元侍女で今は源氏の元で仕えている右近が、夕顔の娘の⑫玉鬘と偶然再会し、右近は源氏にこのことを伝え、源氏は花散里を玉鬘の養育係として玉鬘を六条院に引き取る。玉鬘はとても美しい女性に育ち、内大臣〔＝⑩頭中将〕の息子の㉚柏木（よって実は玉鬘は柏木の実の姉にあたるのだが、柏木はそんなことは知らない）、源氏の弟の螢宮（ほたるのみや）（人物関係図(2)の㊷）、㉛髭黒（ひげぐろ）の大将（たいしょう）などのたくさんの男性から求婚される。養女として引き取った源氏ですら、玉鬘の美しさに言い寄って添い寝をしてしまうほどであった。玉鬘はそんな源氏に困惑する。その頃、実父の内大臣〔＝⑩頭中将〕は夢占で「夕顔との間の娘が、養女として育てられている」と告げられ、行方を探す。

夏のある日台風が来て、その日たまたま六条院に来ていた夕霧は紫上を見てしまい、紫上の美しさに目を奪われ頭から離れなくなる。その翌日、源氏は夕霧を引き連れて女君たちのお見舞いに行く。玉鬘の元を訪れた際も、源氏と玉鬘のいる部屋を覗いてしまった夕霧は、玉鬘の美しさにまた目を奪われ、さらに親子であるはずの源氏が玉鬘に寄り添っているのを見て不審に思う。美しい女性たちに目を奪われながらも、雲居雁への気持ちは変わらず手紙を送り続ける。

玉鬘の裳着の儀式を行うことになり、源氏はその腰結いの役を実父の内大臣〔＝⑩頭中将〕に依頼する。理由がわからない内大臣は最初断るが、源氏から真実（玉鬘が自分と⑪常夏の女の娘だということ）を聞かされ、喜んで引き受ける。玉鬘は⑱冷泉帝への出仕が決まっていたが、その前に強引に㉛髭黒の大将が契りを交わす。最初、玉鬘は無骨な男性である髭黒の大将と深い仲になってしまったことが相当ショックで、なかなか打ち解けようとはしなかったが、大切に扱ってくれる髭黒の大将

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に次第に心を開いていく。ちなみに、髭黒の大将には前妻がいる〔人物関係図⑵の(51)〕がうまくいってなかった。

東宮〔＝後の㉙今上帝〕の元服が決まり、㉖明石姫君の入内も決まってしまったので、内大臣は㉗雲居雁の入内を諦め、夕霧との結婚をようやく認める。

紫上は明石姫君の後見役を、実母である明石君に譲り、明石君は大喜びである。ここで初めて紫上と明石君は対面し、お互いが素敵な女性であることを認めあう。

朱雀院〔＝源氏の兄にあたる⑤朱雀帝〕は、病気がよくならず出家を決意するが、後見役がいない㉜女三宮（おんなさんのみや）のことが気掛かりで、源氏に正妻として託すことを相談する。当時源氏は四十歳、女三宮は十四歳で二十六歳もの差があったが、兄からの頼みが断り切れず、承諾する。源氏は実際に女三宮と対面して、あまりの幼さに愕然とし、紫上に対する愛情を再確認したが、一方、それまで正妻格であった紫上にとっては、女三宮が「正妻」として源氏に嫁ぐことに不安を覚え、また、源氏に対しても不信感が募り、出家を望むようになる。が、源氏は紫上の出家を許さない。

㉚柏木は、女三宮との結婚を切望していたが、まだ若くて頼りないということで許してもらえず、源氏の妻となった後も未練を残していた。たまたま、女三宮の姿を垣間見た柏木は、さらに女三宮に夢中になる。

紫上が三十七歳の厄年の時、病気で倒れ、源氏は紫上につきっきりになる。紫上は死にかけるが、なんとか命を取り留める。その時に、また⑮六条御息所の死霊が現れ源氏を驚かせた。一方、柏木は、女三宮の姉の㉝女二宮（おんなにのみや）〔＝落葉の宮（おちばのみや）〕と結婚するが、女三宮が忘れられない。源氏が紫上につきっきりで、女三宮のところに訪れないことを聞いた柏木は、自分の気持ちを抑えられずに、女三宮の元へ通い契りを結んでしまう。さらに女三宮が柏木との子を妊娠してしまう（その子が㉞薫（かおる））。幼い女三宮は、柏木からの恋文をすぐ見つかるような夜具の下に隠しており、源氏は案の定すぐにその手紙を見つけて、父親が柏木であることを知る。自分も桐壺帝に同じことをしたが、自分の妻に手を出された源氏は、柏木が許せない。六条院で会った時に、柏木は源氏から思いっきり嫌味を言われ睨みつけられ、小心者の柏木は罪に恐れおののき病気になる。女三宮は無事、薫を出産したが、女三宮も罪の意識に苦しみ、実父で既に出家していた⑤朱雀院に出家を申し出る。源氏は引き留めたが、そのまま出家してしまう。それを聞いた柏木はショックを受ける。お見舞いに訪れた㉑夕霧に「妻の㉝落葉の宮のこと」と「源氏への謝罪」を遺言として残し、その後亡くなる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

夕霧は親友の遺言通り、落葉の宮の元を訪れ慰める。その帰り道に、落葉の宮の母親（人物関係図では省略）から柏木の形見である横笛をもらう。が、夢に柏木が現れ「その笛を伝えたい人は他にいる」と告げられる。後日、源氏の元を訪れた夕霧は薫を見て、柏木に似ていることを不審に思い、源氏に柏木の遺言と横笛の話を伝える。源氏は横笛を預かる。夕霧は、落葉の宮を慰めているうちに恋愛感情を抱くようになる（落葉の宮は拒み続けていた）。それに気づいた妻の㉗雲居雁と夕霧は大喧嘩をするが、落葉の宮に対する気持ちも捨てられず、結局、強引に落葉の宮と契りを結んでしまう。翌朝、雲居雁との邸に帰ってくると、雲居雁は幼い子供たちの数人を連れて実家（⑩内大臣〔頭中将〕の邸）に戻っていた。夕霧は連れ戻しに行くが取り合ってもらえない。

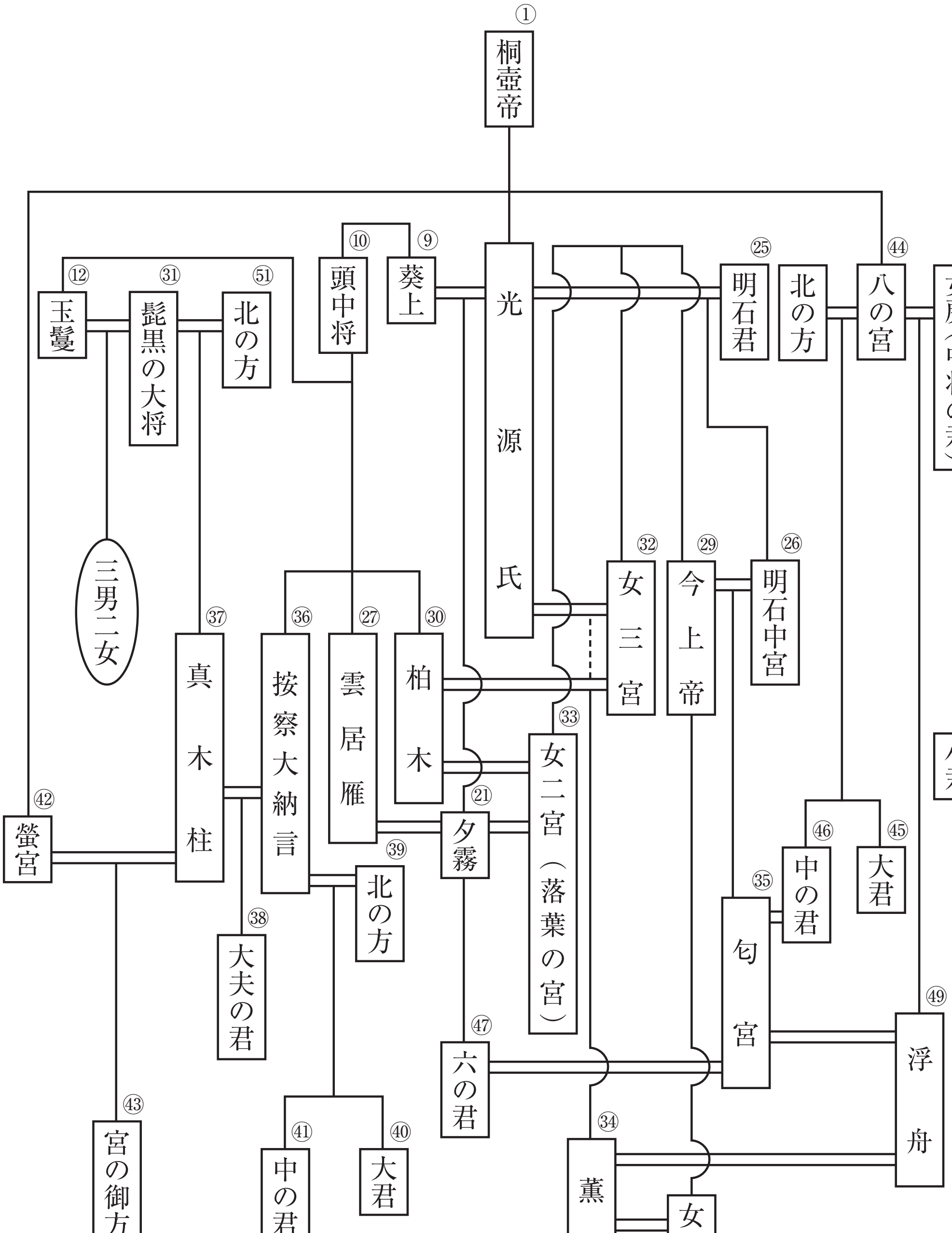
病床に伏している紫上は一向によくならず、相変わらず出家を願い続けるが、源氏は決して聞き入れない。さらに容態が重くなり、㉖明石中宮がお見舞いに来る。明石中宮は今上帝との間に息子（㉟匂宮（におうのみや））を設けており、匂宮は紫上のことを慕っていた。紫上はまだ幼い匂宮に「大人になったら、ここに住みなさって、この部屋の前にある紅梅と桜とは、花の季節に心をとどめて忘れずに鑑賞なさってください。そのような折には、仏壇にも（花を）お供えください」とそれとなく遺言を残す。秋の夕暮れ、明石中宮がまたお見舞いに来て、源氏と三人で歌を詠みかわし、その直後に紫上は、中宮に手を取られながら亡くなる。源氏は悲しみのあまり、紫上から離れようとしなかった。

新春を迎えるが、源氏の心はふさがったまま。年が明けたら出家をしようと考えている源氏は、その準備を進める。紫上からの手紙をも破って燃やしてしまう。源氏は、六条院で行われた御仏名の時に、久しぶりに公に姿を現し、昔から知っている僧や貴族たちがその昔よりも一層輝いた姿を見て涙を流した。

＊この次に【雲隠】という巻名だけが伝わり本文が現存していない巻がある。42帖からは源氏は出てこないので、この間に源氏死去。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈『源氏物語』人物関係図(2)〉



※人物関係図(1)と同一人物は(1)と同じ番号をふっています。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈42帖「匂宮（匂兵部卿）」～54帖「夢浮橋」〉（＊45帖「橋姫」～54帖「夢浮橋」＝宇治十帖）

㉑夕霧は㉝落葉の宮を六条院の夏の町に住まわせる。そして夕霧は、㉗雲居雁と落葉の宮のところに、一日交代で月十五日間ずつきちんと通う。

㉙今上帝と㉖明石中宮の子である三の宮〔＝㉟匂宮〕が元服をして兵部卿（ひょうぶきょう）となる。兵部卿〔＝㉟匂宮〕は、自由な恋愛を望む明るい活発な性格。光源氏〔本当は㉚柏木〕と㉜女三宮の子㉞薫は、⑱冷泉帝と㉒秋好中宮にかわいがられて育つが、薫は自分の出生に関して不審に思っており、出家をしたいとまで考えるような根暗な性格である。薫は生まれつき、仏の身にあるという香りが身体からしていた。兵部卿はそんな薫に対抗して焚物に熱心になり、「匂ふ兵部卿、薫る中将」と世間で呼ばれた。

柏木の弟の㊱按察大納言（あぜちのだいなごん）は㉛髭黒の大将の娘の㊲真木柱（まきばしら）と結婚して息子〔㊳大夫の君〕がいる。按察大納言には亡くなった㊴北の方（＝「夫人」の意味）との間に二人の娘〔㊵大君（おおいぎみ）（＝「長女」の意味）・㊶中の君（なかのきみ）（＝「次女」の意味）〕がおり、真木柱にも亡くなった㊷螢宮との間に姫君〔㊸宮の御方（みやのおんかた）〕がいた。大君は東宮のもとへ入内しており、按察大納言は「中の君を匂宮の嫁にしたい」と考えていたが、匂宮は宮の御方に興味があった。が、宮の御方は消極的な性格であった。真木柱はそんな娘の恋愛に悩む。

⑫玉鬘は㉛髭黒の大将が亡くなり、大将との間にできた三男二女の将来をどうしていくかに悩む。そんな中、玉鬘邸に若者たちが集まって楽器を演奏したが、㉞薫の和琴を聴いた玉鬘は、亡き父の⑩頭中将〔内大臣〕や弟にあたる㉚柏木に似ていることに気づくという出来事があった。結局、玉鬘の二女のうちの長女〔大君〕は冷泉院のもとへ参院させ、寵愛を受ける（人物関係図では省略）。大君は女の子と男の子を儲けるが、周囲の嫉妬に苦しみ、里に戻ることが多くなった。そして、次女〔中の君〕は今上帝へ入内させた（人物関係図では省略）。

その頃、桐壺帝の第八皇子（源氏の異母弟にあたる）の㊹八の宮が時勢とともに落ちぶれ、今は宇治で娘二人〔㊺大君・㊻中の君〕と暮らしながら出家をしたいと考えていた。薫は八の宮の存在を知り、宇治に通うようになり、たまたま大君と中の君の姿を垣間見て興味を持つ。八の宮の侍女の中に、亡き柏木の乳母の娘である老女房がおり、その女房から薫は自分の出生の秘密〔本当の父は源氏ではなく柏木だということ〕を知る。薫から姫君たち〔㊺・㊻〕の話を聞いた匂宮も、宇治の姫君た

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ちに興味を持つ。八の宮は厄年の時に、娘たちの後見役を薫に託した。一方、娘たちには「人の言葉に簡単になびいて、この宇治の山里からさまよい出るな」と、いい加減な男の誘いにのって結婚しないように訓戒してから、八の宮は宇治の山寺に行き、そこで亡くなる。

それから月日が経ち、薫は大君と対面し、匂宮と中の君を結婚させ、自分が大君を都に引き取るということを伝えるが、大君は八の宮からの遺言もあり「結婚しない」と決めていて、「（妹の）中の君を薫と結婚させたい」と考えており、薫の話には取り合わない。が、薫は大君に夢中になり、八の宮の一周忌の際に求婚するがやはり拒絶される。薫は「中の君と匂宮を結婚させれば、大君が自分になびくかもしれない」と考え、匂宮を宇治に案内し、中の君と契りを交わさせた。結果、大君は薫になびくどころか、そんなことをした薫に失望する。一方、匂宮は、中の君との結婚を母の㉖明石中宮から反対され、父の㉙今上帝が㉑夕霧の娘〔㊼六の君〕との結婚を決め、宇治に通えなくなる。これを聞いた大君は、妹のことが不憫で悩み過ぎて病気になってしまい、薫が熱心に看病したが亡くなる。

後に明石中宮から許され、匂宮は㊻中の君を二条東院に引き取る。中の君は匂宮から大切に扱われ、「自分の娘を嫁がせよう」と思っている夕霧は不満を抱く。いよいよ匂宮と六の君の結婚の日取りも決まり、中の君は衝撃を受けるが、何もないように振舞う。中の君は妊娠していたが、匂宮は気づかない。渋々六の君と結婚した匂宮であったが、実際六の君に会ってみると予想以上に美しく、次第に中の君の元に通わなくなる。悲しむ中の君を薫が慰めていたがそれが次第に恋心になり、㊺大君も失った薫は中の君を匂宮に託したことも後悔していたので、中の君に思いを告げようとしたが、中の君が妊娠中であることに気づき諦めた。だが、それを感じた匂宮が中の君への愛情を復活させ、中の君の元へもまた通うようになった。

中の君は薫に、「実は異母妹〔八の宮が㊽女房（中将の君）との間にもうけた女の子。八の宮が認知をしなかったため、女房が育てている〕がいて、亡き大君に似ている」という話を伝える。その後、薫は偶然その異母妹〔＝㊾浮舟〕に出会い、垣間見をし、大君とあまりにも似ていたため驚愕するが、「認知もされていない女房の娘」という浮舟の身分の低さに積極的にはなれずにいる。後に、事情があり、㊽中将の君は㊻中の君に浮舟を預けるが、たまたま匂宮が浮舟を見つけ言い寄る。それを知った中将の君はすぐに浮舟を三条の小屋に移した。それを知った薫が三条の小屋へ行き、そのまま一夜を過ごし、翌朝浮舟を宇治に連れて行った。一方、匂宮は浮舟のことが忘れられない。浮舟の居所を知った匂宮は、宇治へ行き強引に契りを結

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ぶ。浮舟は異母姉の中の君に申し訳なく悩みながらも、強引な匂宮に惹かれてしまう。何も知らない薫は浮舟を都へ迎える決心をする。そんな中、匂宮は再度浮舟の元へ通う。浮舟は対照的な性格である薫と匂宮の二人の愛に悩み苦しむ。そして、薫と匂宮の使者が鉢合わせしてしまったことから、ついに薫に匂宮との関係がばれてしまい、薫から恨み言を言われ、匂宮との愛も忘れられず、悩み疲れた浮舟は自ら死を選ぶ。浮舟がいなくなり、宇治の山荘は大騒ぎとなるが、事情を知っていた女房が「宇治川に身を投げたのだろう」と思う。浮舟の母親の中将の君も嘆き悲しむが、世間体があるので、亡骸がないままその日のうちに葬儀を行った。浮舟の死を知った薫は、自分が宇治に放置していたことを後悔し、匂宮はショックのあまり引き籠ってしまう。

月日が経ち、それぞれ新しい恋をするが、薫はやはり心のどこかで宇治の姫君たち〔大君・中の君・浮舟〕が忘れられない。一方で浮舟は、実は生きていた。「宇治川へ身を投げよう」と思っていた浮舟は、そのまま宇治川のほとりで気絶をしてしまっており、たまたまそこを通りかかった横川の僧都に助けられる。僧都は浮舟を妹の尼に託す。妹尼は実の娘を亡くしており、浮舟のことをとても大切に看病した。看病のおかげで、意識を取り戻した浮舟は、自分が死ねなかったことがわかると「出家をさせてほしい」と願う。妹尼が留守の間に横川の僧都に懇願して、浮舟は出家を遂げる。横川の僧都は㉖明石中宮と知り合いで、薫は明石中宮から「横川の僧都が宇治川のあたりで女性を助けた」という話を聞き、浮舟の異母弟の㊿小君（こぎみ）と一緒に横川の僧都の元を訪れる。薫は横川の僧都からその女性の詳細を聞き出し、浮舟であると確信する。翌日、小君が薫の使者として、薫と僧都からの手紙を託されて、浮舟のいる小野へ訪れる。浮舟は簾越しに小君を見て動揺するが、対面することを拒否する。薫からの手紙を渡され、変わらぬ筆跡と紙の香りに思わず泣いてしまうが、「宛先違いでは」と言って受け取らなかった。小君は返事ももらえずむなしく薫の元へ帰った。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第八講　復習問題

① 「女手を心に入れて習ひし盛りに」の意味として、最適なものを次の中から選べ。

ア　漢字に心を奪われて熱心に習っていたころに
イ　仮名文字を熱心に学んでいたころに
ウ　女性の心を手に入れようとあれこれ模索していたころに
エ　女性からの手紙を熱心に集めていたころに

② 「おどろおどろしく」の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　あきれ果てて
イ　ものものしく
ウ　泥にまみれながら
エ　びっくりした様子で

③ 「昼ははしたなき心地して、暮れてぞのぼる。」の傍線部の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　腹立たしい気持ち
イ　不思議な気持ち
ウ　愉快な気持ち
エ　みっともない気持ち
オ　待ち遠しい気持ち

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「うとくおぼすべからず。」の傍線部の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　つらく　　イ　よそよそしく　　ウ　不満に
エ　心配に　　オ　不思議に

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第八講　模範解答

問一　**過ぐしつれ**　已然形
しつ　終止形

問二　光源氏が出家する前にしておく様々な身辺整理のこと。

問三　ア　様々な女性から光源氏に差し上げなさった手紙
イ　亡くなった人

問四　紫の上の筆跡を見るだけで涙がとめどなく流れるので、周囲の女房にあまりにも心が弱っていると思われそうなことが、源氏は恥ずかしくみっともなかったから。

問五　御手・墨つき

〔現代語訳〕

（源氏は）今年をこうして悲しみをこらえて過ごしてきたので、今は（もう出家しよう）と俗世を捨てなさる時が近くお思いになり覚悟なさるが、しみじみ感慨深いことがあれこれと尽きることがない。次第に出家前にしておく様々なことを、心の中で思い続けなさって、お仕えしている人々にも、身分の程度に応じて形見の品を与えなさったりして、おおげさにこれが最後だというふうには振舞いなさらないけれども、お側近く仕える人々は、（源氏が）出家のご本懐を遂げなさるご様子と拝見するにつれて、年が暮れていくのも心細く悲しいことこの上ない。

後に残すと見苦しいことになるはずの女性たちのお手紙なども、「破り捨てるのも惜しい」とお思いになったのであろうか、少しずつ残しなさっていた（手紙）を、何かのついでに見つけなさって、破らせなさったりなどするときに、以前、須磨・明石に蟄居していた頃、様々な女性から（源氏に）差し上げなさった手紙もある中で、紫の上からのご筆跡（の手紙）は、特に一つにして結んであったのだった。自らがそのようにしておかれたことであるが、遠い昔になってしまった時のことをお思いになるにつけても、たった今（書いた）ような墨の色の筆跡など、本当に千年先までの形見にでもきっとできそうなのを、（出家して

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しまうと）見ることもなくなってしまうのだろうよとお思いになると、（残しておく）甲斐もなくて、気心の知れた女房二三人ばかりに（命じて）、ご自分の前で破らせなさる。

本当に、これほど（心惹かれるわけ）ではない人のことでさえ、亡くなった人の筆跡と見るのは悲しいことなのに、まして（紫の上の筆跡を御覧になると）一段と目の前が暗くなり、どの文字とも見分けがつかないほど流れ落ちるお涙が紫の上の筆跡の上に流れるのを、女房たちもあまりに心が弱っていると拝見しそうなのが恥ずかしくみっともないので、（源氏は紫の上の手紙を傍らに）押しやりなさって、

死出の山……＝死出の山を越えてしまった人〔＝紫の上〕を慕う気持ちで、筆の跡を見ながらまだ心が乱れることだよ。

〔重要単語〕

○おどろおどろし…①**気味が悪い**。　②**大げさである**。

○うとし【疎し】…①**疎遠だ**。　②よく知らない。　③無関心だ。

○かきくらす【掻き暗す】…①雲が空一面を暗くする。　②**悲しみにくれる**。

○はしたなし【端なし】…①**中途半端だ**。　②**みっともない**。　③つれない。　④（雨などが）はげしい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第八講　解答解説

〔解説〕

①「**女手**」は「**仮名**」のこと。「**男手**」は「**漢字**」。よって、正解はイ。

②「おどろおどろし」は、重要単語で「気味が悪い・おおげさだ（ものものしい）」の意味。よって、正解はイ。

③「はしたなし」は、重要単語で「中途半端だ・みっともない」の意味。よって、正解はエ。

④「うとし」は、重要単語で「疎遠だ」の意味。よって、正解はイ。

〔解答〕

①イ　②イ　③エ　④イ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。